演奏芸術の聴衆の構造*

——東京地区演奏会の事例分析——

松田芳郎
有田富美子

* 本稿は、財団法人「放送文化基金」の助成による倉林義正・松田芳郎を中心とする研究「公共放送における放送交響楽団の経済的基盤とその助成のあり方に関する国際比較研究」の成果の一部である。これ迄、この研究は、各種オーケストラ演奏会の聴衆に対するアンケート調査を重要な素材データとして行われてきた。今回財団法人二期会オペラ振興会常務理事河内正三氏の協力を得て調査をオペラに迄拡大することが出来た。これらの助成・協力に対して、心からの謝意を表する。

本稿の基礎となった諸計算は、主として一橋大学経済研究所計算機室、東京大学大型計算機センターおよび一橋大学データ・ステーションを利用して行った。データ・ファイル編成の際のアンケート調査の調査票の社会経済諸属性のコーデング等は、岩見彰子・小長谷文子氏、作曲者・作品等の聴衆の好みに関する事項のコーデングには薬師寺明子・古市恵子氏の協力を得た。ただ後者に関する解析結果は、紙幅の関係で省略した。折を見て公表する予定である。

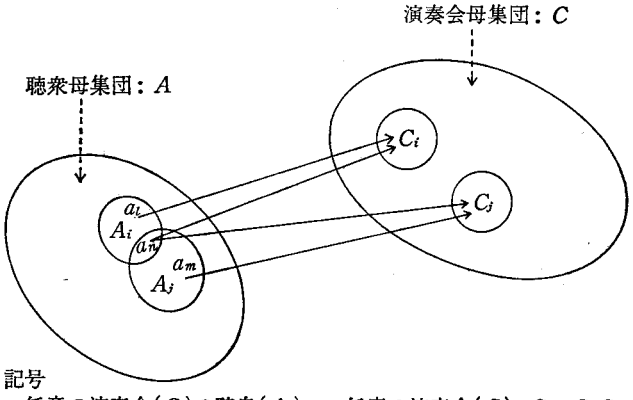
I　演奏芸術の現代のパトロンの実像

いわゆる演奏芸術の公演を維持するのは、かつては、宗教組織であるか、王侯貴族（藩公・華族と言い換えてもよい）の財力であった。近代社会に於ては、それが公共財として、政府・国庫の補助の対象となるか、それとも大衆の支持を獲得するかのいづれかにならざるを得な

いが、いづれにしても社会のなかで広範囲の人々の合意をとりつけなければならないとなると、そこに開かれた世界は、まさに、「私は裕福になる必要があります、狂おしいまでに！ 精神を持合せぬ莫迦者どもを蒼白たらしめるために。――それは解放される苦役囚（フォルサ）の魅力！」[1]と叫ばずにはいられない「残酷物語」(*Contes Cruels*, 1883)の世界に他ならない。このことの帰結としては、入場者一人の負担しうる費用に限度がある以上は、演奏会そのものの規模の拡大というオーケストラの演奏会の形式をとるか、音楽の持つ抽象性から逃れて、物語をもって視覚と組み合せうるオペラ・バレーといった方式をとらざるを得ない。これらの演奏会場に足を運ぶ人達、現代における演奏芸術のパトロン達がどの様な人々によって構成されているのかを計測することは、現代の演奏芸術の置かれている状況を把握する一つの方法であろう。

これ迄、我々の行ってきた、日本の東京地区を対象としたオーケストラ演奏会の入場者に対するアンケート調査は、まさに、現代の王者であり、芸術のパトロンである人々が、どのような層の人達で構成されているかを明らかにすることを目的の一つとしてきた。先に論じた様に[2]、我々は昭和五十二年度にＮＨＫ交響楽団（以下Ｎ響と略す）、昭和五十三年度に東京フィルハーモニー交響楽団（東フィルと略す）、東京交響楽団（東響と略す）という三つのオーケストラの聴衆に対するアンケート調査の結果を解析し、これらのオーケストラの聴衆の層が違うこと、さらに、それらのオーケストラ相互に同一の聴衆が出現している統計的可能性を解析してみた。このことは、以下の様な標本設計に対応していると解釈しうる。東京地区においての演奏会のすべてを母集団とし、そこから特定の演奏会を抽出する（第一段抽出）。さらに、その演奏会からアンケート回答者を抽出する（第二段抽出）。二段階抽出の標本抽出を行い、そこから得られた個々の回答者は、第一段抽出の演奏会相互に重複して出席し、回答している可能性があるので、それらの回答者相互の重複を排除して、演奏会に出席しているものという母集団の構造を推定するという作業に他ならない（第1図参照）。本稿では、この作業の拡大として、昭和五十三年に二期会のオペラ公演で行ったアンケート調査の結果を解析する。[3] この解析の結果から得られるマクロ的含意については、共同研究者の倉林義正の別稿「オー

第1図　演奏会と聴衆の対応関係



記号
任意の演奏会（C_i）の聴衆（A_i）

任意の演奏会（C_i）：$C_i \subset C$, $C_j \subset C$
任意の聴衆　（a_l）：$a_l \in A_i$
$a_m \in A_i$, $a_m \in A_j$
$a_n \in A_j$

ケストラの聴衆とオペラの聴衆」にゆずり、本稿では、主として、この複数の調査結果を合成する技法、マイクロ・データ・セットの編成における照合によるデータの統合（マイクロ・データ・マッチング）を中心にして検討することにする。

（1）ヴィリエ・ド・リラダンよりステファヌ・マラルメ宛一八六六年一月付手紙、『リラダン＝マラルメ往復書翰集』白鳥友彦訳、森開社、一九七五年。二四ページ。

（2）倉林義正・松田芳郎「サービスとしての演奏芸術とオーケストラの聴衆」『一橋論叢』八二巻三号、一九七九年九月、一六―三三ページ。

（3）この結果の一部は、すでに、倉林義正・松田芳郎「クラシック音楽演奏会における聴衆の実像」（『音楽芸術』三八巻一二号、一九八〇年一二月、三八―四一ページ）で紹介してある。

II　オーケストラ公演の供給と需要

1　オーケストラ公演の総供給量の推定

いま昭和五十三年の東京地区を調査対象とすると、日本のオーケストラ団体によるオーケストラの総演奏回数は、約二〇〇回と思われる。このうち在京の九箇の職業

オーケストラの定期・不定期公演は一九四回であり特別演奏会二回、桐朋学園の定期二回と大阪の職業オーケストラである大阪フィルハーモニー交響楽団の定期東京公演一回である。[1] この背後に約四十のアマチュア・オーケストラの演奏会活動が存在していると思われる。[2] これらのオーケストラの演奏会活動を分類することは難しい。特に、オーケストラの定期演奏会は、比較的固定的な定期会員を中心として、比較的安定した聴衆により構成されていると推定されるのに対して、臨時演奏会は、青少年用であるとか、新年、ベートーヴェンの第九交響曲の年末の会といった形で別箇の類型の聴衆を動員している可能性がある。これらの点を無視して、それぞれのオーケストラの演奏会は定期演奏会で代表されるとする。またそれぞれの聴衆の動員数は、使用している演奏会場に比例していると仮定するならば、演奏会場に足を運んだ延人数は、年間約五四万人となり、一回の演奏会には約二、八〇〇人が出席したことになる。実際には、それぞれの演奏会場が満席になることはなく、さらにこれを下まわると思われる。いま入場率について一定の仮定の下に[3]仮説計算を行うと、年間延約四一万人が、一回の演奏会につき、約二、一一五人出席という形で公演を維持していると想定される。

2 オーケストラ公演供給主体と聴衆の実体

ところで、これらの延人員のなかで、実人員何人が、演奏会場に足を運ぶのかについては、それぞれの演奏会に通う人が、同質的であるのか、同質的でないとすれば、どのような人が分布しているかを明らかにしなければならない。我々は、先に、NHK交響楽団と東京フィルハーモニー交響楽団と東京交響楽団という三つのオーケストラの定期演奏会の聴衆集団には異った特性があり、その特性分析からは、これらの三つのオーケストラは、少くとも二つのオーケストラ群、すなわち、NHK交響楽団対、東京フィルハーモニー交響楽団・東京交響楽団に分けることが出来るということを推論した。[4] この二類型は、かなり実体的基礎を持つものであり、いま楽団員の構成数という編成規模と創立年代を基準に示すならば、第1表の数値が得られる。

この表からは、二類型というよりは、むしろ三類型であり、いわゆる四管編成、三管編成、二管編成の、大・

第1表　東京地区のオーケストラの規模と演奏回数（昭和52年）

交響楽団名	創立年	楽員	内訳					平均年齢	昭和52年演奏回数**		
		計*	弦	木管	金管	打楽器	その他		計	定期	不定期
NHK交響楽団	大正15年(1926)	119	77	18	18	4	2	n.a.	72	60	35
東京フィルハーモニー交響楽団	昭和27年	94	58	14	17	5	—	34	18	8	10
東京都交響楽団	昭和40年	92	48	16	16	4	2	33	21	7	14
読売日本交響楽団	昭和37年	89	55	12	16	5	1	37	33	12	21
東京交響楽団	昭和21年	86	48	16	16	4	2	32	17	10	7
日本フィルハーモニー交響楽団	昭和31年	64	40	10	11	3	—	33	25	11	14
新日本フィルハーモニー交響楽団	昭和47年	60	35	8	11	5	1	32	20	9	11
新星日本交響楽団	昭和44年	57	30	11	12	3	1	29	4	3	1
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	昭和50年	49*	29	8	10	1	1	n.a.	5	5	—
	計(平均)	710 (78.8)	431 (47.8)	117 (13.0)	126 (14.0)	35 (3.8)	10 (1.1)	n.a.	215 (23.8)		

* 客員は人数に含めていない。また指揮者・事務局員は含まない。

** 東京地方の公演数のみで，それ以外の地方は含まない。オペラの出演は含まない。またTV・ラジオの放送は除く。

（資料）「演奏会記録」「演奏団体（昭和53年12月現在）」日本演奏連盟編『音楽資料 '79（昭和53年度）』（昭和54年刊）

中・小規模のオーケストラとみる方が正確である。ただ、我々の調査では、第三類型のオーケストラについては、これ迄調査を行っていない。ところで、第一類型と第二類型のオーケストラの聴衆との大きな違いは、第二類型に於ては、若年の人々の比重が高いだけでなく、音楽を専攻する学生や、アマチュアオーケストラで積極的に活動している者の比重の高いこと。第一類型では、既婚男子の中高年齢で、所得水準は最高階層で管理職、既婚女子の専業主婦というのが特徴的な聴衆者類型となってきていた。さらにこのことと、創立年が古く、長年月の定期会員をかかえていることを考慮に入れると、この第一類型では、より受動的な音楽享受者の色彩が強く、これに対して第二類型では、音楽を主専攻とする同業者集団または音楽の積極的享受者としての色彩が強くなってきているといえる。この様な想定が許されるとすれば、第三類型のオーケ

第2表　年間演奏会聴衆数推定（昭和53年）

オーケストラ類型	対象オーケストラ数	定期演奏会回数 年間演奏回数	定期種類†	定期演奏会1回当り想定入場者	年間定期以外の演奏会に行く回数 0回	4回	12回	24回	年間総延入場者数
第Ⅰ類型オーケストラ	1	10	6	2700	1323	648	594	108	*(定期種類)×(想定入場者数)
推定演奏会入場者数				16200*	7938	3888	3564	648	
推定演奏会入場総延人数				162000**	—	15552	42768	15552	**(定期演奏会1回当り総入場者数)×(定期回数)
						→73872→			235872
第Ⅱ類型オーケストラ	6	10	1	1800	648	396	594	126	
推定演奏会入場者数				10800***	3888	2376	3564	756	***(オーケストラ数)×(定期当り想定入場者数)
推定演奏会入場総延人数				108000****	—	9504	42768	18144	****(定期演奏会1回当り総入場者数)×(定期回数)
						→70416→			178416
第Ⅲ類型オーケストラ	2	5	1	1800	648	396	594	126	
推定演奏会入場者数				3600***	1296	792	1188	252	
推定演奏会入場総延人数				18000****	—	3168	14256	6048	
						→23472→			41472
合　計	9	130		2215（延288000人）	6507	167760			455760

（注）年間定期以外の演奏会に行く回数毎の定期会員の配分比は，以下の表を用いた。

	0回	4回	12回	24回	出所
第Ⅰ類型	49%	24%	22%	4%	AUDⅠファイル
第Ⅱ・Ⅲ類型	36%	22%	33%	7%	AUDⅡファイル

†：定期種類というのは，一つのオーケストラの行う定期演奏会の種類数である。第Ⅰ類型はNHK交響楽団で，3チクルスが，2回同一演奏会を開いている。

ストラについては、さらにこの色彩が強く、その背後には、前記の東京地区で約四十にのぼるアマチュア・オーケストラの参加者が、積極的な享受者として存在すると想定することが出来る。

この九箇の職業オーケストラの定期演奏会を二類型に分割し、それらの聴衆が、この定期演奏会以外に、どの程度各種の演奏会に出席していると考えられるかを仮説計算してみる。第2表に示す様に、この定期演奏会で、約延二八万八千人の出席者が居る。これらの人々が、この定期演奏会以外に出席した演奏会の総数は約延一六万七千人となる。従って、定期演奏会の延出席人数を合せると四五万五千人となる。これは、東京地区の音楽会の聴衆がかならず、自己がホストと考えているオーケストラがあるという仮定に基づいており、著しい過少評価とも考えられる。ただ、先にこの年の定期・不定期の年間オーケストラの出席者数を四一万人と推定しているので、それとの差をとると、約五万五千人が、オーケストラ以外の各種演奏会に出席したことになる。これは、約二千人程度の中規模ホールの演奏会にすると約二十七回分の演奏会となるし、千人程度の小ホールであるとすれば、

約五十回の演奏会ということになる。第3表に示すように、日本人の手による室内楽・器楽曲の小演奏会、ピアノ演奏会を合せただけで四九三であり、このことは、少くとも一つのオーケストラの定期会員となっている人々以外に数多くの聴衆の層のあることを暗示している。

いまこの各種の演奏会の形態全部に亙っての聴衆の状況の解析を行う前に、このオーケストラの聴衆自体が、異った演奏会相互の間で、どのように重複しているかを検討してみる必要がある。この延二八万八千人の聴衆のなかで、この定期演奏会にしか行かない人は、一万三千人であり、従って、これらの人々だけで、延一二万四千の席が年間に占められる。然し、残りの一六万四千人分の席は、一体実質何人の人によって占められていたのかは、このままでは解かれない問題として残ってしまう。

第3表　東京地区演奏会数（昭和52年）

	日本人演奏会	外来演奏会
オーケストラ	221	134
室内楽（ピアノを除く器楽曲）	309	
ピアノ演奏会	184	
小計	493	
計	714	134

（資料）日本演奏連盟編『音楽資料 '79（昭和53年度）』（昭和54年刊）

先に我々は、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏会と東京交響楽団の演奏会が、同一日時に行われたことがないので、同一人物が双方の演奏会に出席して、重複してアンケート調査に回答した可能性を、回答した聴衆の属性の組み合せで、同一の属性パターンを持つものを求めて、統計的照合の可能性を求めた。その結果は、東フィルで約一七・七%、東響で三〇・二%の人が重複する可能性があるが、過去一年の間に日本のオーケストラの演奏会に行ったことがあるという条件を追加すると、それぞれ僅かに五・九%と八・六%に減少することを明らかにした。同様の操作をNHK交響楽団との間で行うならば、N響にのみ見られる属性パターンの者がN響の聴衆者の間では三五%、他方東フィルと東響の合成ファイルの間では一三・六%が、それぞれの聴衆者にのみ見られる属性パターンの聴衆であった。これに対して、調査年次が異るがさらにそれぞれの聴いた当該オーケストラ以外の日本のオーケストラの演奏会に行ったという条件を課すと、N響で、全体の七・二%、東フィル・東響合成

ファイルで、全体の二・七％となる。

いまこの結果から、第一類型のオーケストラの聴衆一万六千人のうちから約七・二％、第二・三類型のオーケストラ一万四千人のうち相互で約六・〇％の重複があると仮定する。この仮定に基くと、核となる聴衆は、全三類型の単純合計約三万人に対して、二万八千人となる。これは多くの仮説計算に基く著しい過少推計であると考えられるが、東京都のアマチュア・オーケストラ約五十が平均楽団員七十五人として三千七百人となり、これらの人が周辺に七・五人の人を聴衆として動員することが出来るとすれば、容易にこの程度の人数となることを考慮に入れるとこの程度の中核となる音楽愛好家の存在を仮定したとしてもさ程おかしなことにはならないであろう。(5)

（1） 日本演奏連盟『音楽資料'79（昭和五十三年度）』昭和五十四年の「演奏会記録」を使用して算出。

（2） 日本におけるアマチュアオーケストラの現状については、日本アマチュアオーケストラ連盟による『アマチュアオーケストラの実態一九七九』という調査報告書がある。本稿では『フィルハーモニー』五二巻七号、一九八〇年七月号に再録の数値を利用した。森下元康「アマチュアオーケストラと共に――新たな視点への提言――」および同付録「アマチュア・オーケストラ　実態調査の集計」（四〇―五一ページ）

（3） 大ホールであるNHKホールについては、先のNHK交響楽団のアンケート調査の際の数値を基礎に七五％、中規模ホールについては、東京文化会館大ホールにおける東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団のアンケート調査の際の数値を基礎に八〇％と仮定している。

（4） 周知の様に、昭和五十二年は、東京都の消防法の改正に伴って、ホールの防火施設の拡張工事のため、多くのホールが改装工事を行った。特に影響の大きかったのは東京文化会館大ホールの改修であり、ここを定期演奏会場としていた多くのオーケストラが、秋のシーズン中日比谷公会堂を始めおのおの若干小規模のホールにその演奏会場を移している。

（5） 全体で定期会員総累計三〇、六〇〇人として、年間の一人当り平均演奏会出席回数を求めると、この仮説計算からは一四・九回という結果が得られる。『音楽の友』誌の読者を対象としたアンケート調査によると、東京地区の演奏会に行く年間平均回数は一三・〇回であるとしている。この調査は、雑誌の購読者という点で著しく若年層に偏った回答者であると推定されるが、一つの比較対象の数値とみることが出来る。「Concerts '80 in Japan, 読者一六三八人の証言にみる演奏会の今日・明日（四月号読者アンケート

より)」『音楽の友』三八巻六号、昭和五十五年六月号。

Ⅲ　オペラ公演の聴衆の実像

1　二期会オペラの聴衆のAUDファイル

a　オペラ調査の目的

昭和五十三年のいわゆる演奏芸術の公演の統計が示すように、オーケストラの聴衆のかなりの部分が、室内楽・ピアノ独奏会等々の小編成の器楽曲中心の演奏会の聴衆とつながっているとして、いまひとつオーケストラの聴衆は、管弦楽を不可欠の伴奏としているけれども、そのほかに視覚的要素とも結合した演奏芸術であるオペラ・バレーの観衆とも共通の部分があるといえる。特にオペラの観衆は、声楽・合唱の公演の聴衆とも地つづきであり、それらの聴衆がどの様な属性をもっているかは、演奏芸術の聴衆の全容を明らかにするためには検討に値する対象である。先に述べた様に、幸に二期会オペラ振興会の協力を得て昭和五十三年十一月の二期会公演で行った聴衆のアンケート調査がある。これはまさにこの点の解明をも一つの目的としている。調査結果の大要は、別の機会および倉林義正の別稿でも詳述したが、[1]そこから得られる結論の一つとして、二期会の観衆の属性は、東京フィルハーモニー交響楽団や東京交響楽団の聴衆と比較して、NHK交響楽団の聴衆と類似していたことがあげられる。このことの持っている含意を明らかにするために、この調査手法の詳細と既存の調査との関係を分析してみる。

b　二期会AUDファイルの構成

二期会の調査は、これ迄の我々の聴衆調査とほぼ同様の内容を持った調査票を使用して行われた。[2]調査対象は二つのオペラ公演、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》(以下DJ［Don Juan］と略す)の四回の公演と、ヤナーチェック《利口な女狐の物語》(以下CV［Cunning Vixen］と略す)の三回の公演について行われた。それぞれ六七九と五六八の回答が得られている。これらの回答の結果を計算機によるデータ処理のためのファイルとして編成したものを、AUDⅢファイルとして、我々の一連のAUD(Audience)・データ・ファイルの部分ファイルとする。このAUDⅢファイルは、DJ、CVの公演毎の部分ファイルによって構成されている。このDJ、

第4表　二期会オペラ公演聴衆調査回収率

座席価格	入場者数		回答者数		回収率	
	DJ[1]	CV	DJ	CV	DJ	CV
	人				%	%
S席 6,000円および招待客	480	397	131(14)[2]	95(10)[2]	27.3	23.9
A席 5,000円	1177	1105	159	81	13.5	7.3
B席 4,000円	906	872	242	286	26.7	32.8
C席 2,500円	448	402	77	57	17.2	14.2
不明	—	—	70	49	n. a.	n. a.
計	3011	2776	679	568	22.5	20.5

（注） 1） DJ は，5 回公演中，聴衆のアンケート調査を行った 4 回分の公演の入場者数である。
2） （ ）の中の数はS席中の招待客の回答数で，内訳である。

括して、DJ、CVの聴衆とみなすことにする。（調査の回収状況の詳細は第4表に示している）。このことは、ここでの集計処理が、オペラの聴衆の公演への参加の総量を推定するためではなく、オペラ聴衆の特徴を知るためであり、DJ、CVの各部分ファイル内の回答者は、相互に別人であると仮定して合成することを意味している。これに対してDJとCVとの間では、かかる仮定は成立しない、双方の聴衆であった人の回答が含まれている可能性もある。この点を次に検討する。

c　DJファイルとCVファイルの合成

この調査は調査票に個人名を記入しない匿名回答であるから、同一人物がDJとCVとの双方の公演に出席して回答したかを、直接に調査票を一対一対応させて照合させることは出来ない。先に東京フィルハーモニー交響楽団聴衆者のファイル（以下TPファイルと略す）と東京交響楽団聴衆者のファイル（以下TKファイルと略す）とを合成した様に（合成したファイルを以下AUDⅡファイルと呼ぶ）、回答した聴衆の各種の属性を組み合せて属性パターンを合成し、同一の属性パターンを持

CV内で、プリマドンナの配役が変っているために、二回以上観て、しかも二回以上回答した人が存在する可能性はあるが、一応かかる観衆は存在しないと仮定し、またそれぞれの公演毎に調査に対する反発の度合は差がないものとして、DJ、CVの各公演毎の回答は一

つものが両ファイルのなかに存在するかを調べて、統計的照合の可能性を追求してみる。

いま男・女性別、既婚・未婚の別、年齢（十階層）、最終学歴（五階層）、所得（七階層）の六箇の属性で、属性パターンを合成する。計算上では三〇、八〇〇箇の組み合せがあるが、男・主婦といった実際にあり得ないパターンもあり、現実に出現したパターンはDJで二七九、CVで二七六である。これらの属性について完全回答の調査票が、それぞれ五四九と四八二であることを考慮に入れると実際に出現するパターンはそれ程多くないといえる。特に職業と月収の間には強い相関があり、属性を追加しても出現する属性パターンはそれ程増加しない。

これらの諸属性に、音楽活動への関心、音楽活動に費す時間、二期会オペラ愛好会への帰属の有無、同会員になってからの期間、演奏会場から自宅迄の時間距離の四属性を追加することで、DJで四七七パターン、平均一パターン当り一・一五人、CVで四二五パターン、平均一パターン当り一・一三人に迄聴衆を分類することが出来る。(3)（第5表参照）

実際に出現したパターンを精査するならば、一般の非

第5表　属性パターン出現数

調査対象属性	階層数	累積組合せ可能数	DJ ファイル 出現属性パターン数	DJ ファイル 最大頻度	CV ファイル 出現属性パターン数	CV ファイル 最大頻度
(1)男女性別	2	2	2	276	2	243
(2)既婚・未婚別	2	4	4	180	4	171
(3)年齢	10	40	33	78	29	88
(4)最終学歴	5	200	97	64	87	67
(5)職業	22	44×10^2	226	53	220	50
(6)月収	7	308×10^2	279	53	276	50
(7)音楽活動への関心	7	2156×10^2	356	40	337	40
(8)音楽活動の時間	8	12936×10^2	386	26	360	24
(9)愛好会員種類	9	12936×10^3	431	23	397	21
(10)家からの時間距離	10	51744×10^3	474	13	425	11

学生の聴衆については、無業の主婦に関する四人の所属する一パターンを除いては、二人所属パターンが一〇であり、それ以外はすべて、一人パターンになってしまう。この調査対象中には、学生が多く、しかも音楽を主専攻とする者の比重が高く、全体の一五・二％を占めており、これらが共通属性を持っている。最大の出現頻度を持つのは女子・未婚・二十―二十四歳・大学生・音楽主専攻・毎日音楽活動・非会員・三十分―一時間の距離に居住という者であり、ＤＪで十三人、ＣＶで十一人がこのパターンに属している。いづれにしても、十項目程度の属性で、ほぼ調査対象が一義的に定義することが出来る。

この調査票のなかには、ＤＪの聴衆については、《利口な女狐の物語》にいく予定であり、それに期待しているかという項目があり、ＣＶの聴衆については《ドン・ジョヴァンニ》にいったかどうかという項目がある。これらの項目から、ＤＪでＣＶにも所属する可能性のあるものは一五二人、ＣＶでＤＪにも所属する可能性のあるものは一九四人である。これらの相互に重複する可能性のある部分ファイルについて、共通な属性パターンを持つ[4]ものを照合した結果、十七属性パターンで合計二二人がこれに属することが判った[5]。このことは、ほとんど大部分の者が、ＤＪとＣＶに属していても調査票に対しては一回しか回答していないことを含意している。ＣＶファイル全体で見るならば三・八七％が二度記入した可能性があるのに過ぎない。しかも、一対多、又は多対多の対応の六パターンは学生であり、一対一対応の中の五パターンも学生で占められていることを考慮に入れると、学生については、同一の人の回答でない可能性があり、重複回答の比重はさらに下ると推定される。類似の現象は、東京フィルハーモニー交響楽団・東京交響楽団で、「前回ご記入の方は、この欄のみ記入下さい」として、当日の演奏の評価のみを記入する方式をとったときにも現われており、再度回答したものは、それぞれ全体の七・四％、四・九％に過ぎなかった。

これからＤＪ・ＣＶ両ファイルを単純合併することによって、二期会オペラの聴衆者の実像を推定することは統計的には可能であると思われる。以下の分析に於ては、ＤＪ・ＣＶの両部分ファイルと明示されない限り、両ファイルを単純併合したファイルによる推論である。

（1） 二六ページ注（5）参照。および本誌本号一―一九ペ

ージ参照。

（2）調査票は、別稿の倉林義正「オーケストラの聴衆とオペラの聴衆」本誌一九ページに再録してある。

（3）属性パターンの対応状況は左表の様になる。

属性パターン数 DJ	属性パターン数 CV	部分ファイル パターン所属人員（人）
10	9	2
2	5	3
4	1	4
2	1	6
1	1	7
1	1	8
0	1	11
1	0	13
21	19	

（4）ここで取りあげた属性パターンは上記の十属性である。これらの属性は、同一月内ではほぼ安定している属性であり、記入時の気持や思い出しうるかどうかで左右されることの少ないものであると考えられるので、これ以外の属性は追加していない。

（5）属性パターンの対応状況は、左表の様である。

属性パターン数	対応関係
11	1対1
4	2対1
1	3対1
1	2対2
17	

2　オペラの供給と需要

ここで二期会ＡＵＤファイル（ＡＵＤⅢ）のデータの占める昭和五十三年のオペラ公演に占める位置について検討してみる。第6表に示す様に、六十九回の日本人の手になるオペラ公演が行われ、そこでは、約八万三千人

第6表　日本人のオペラ公演（昭和53年）

オペラ公演団体	創立年	楽員*公演回数	
(1)二期会	昭和27年	545**	14
(2)東京室内歌劇場	昭和44年	80+	11
(3)パルコ・オペラ	n.a.	n.a.	10
(4)藤原歌劇団	昭和9年	n.a.	9
(5)東京オペラ・プロデュース	昭和50年	n.a.	5
(6)日本オペラ協会	昭和32年	100+	5
(7)長門美保歌劇団	n.a.	n.a.	4
(8)ステファノオペラ劇場	昭和39年	78	4
(9)東京室内オペラ協会	n.a.	n.a.	4
(10)こんにゃく座	n.a.	n.a.	1
(11)東京オペラ・プロダクション・インターナショナル	昭和52年	n.a.	1
(12)アポロ・オペラ劇場	n.a.	n.a.	1
計			69

*楽員数は声楽のみ。**準会員合唱団を含む。+余名。
（資料）日本演奏連盟編『音楽資料 '79（昭和53年度）』

の人が観衆として参加したと推定される。公演当りに平均すると約一、二〇七人が一回の上演を享受したと思われる。従って、DJとCVの二ファイルが全体の母集団に占める比重は、座席数にして一六・八%、公演数にして一〇・一%となる。全供給座席数にすると、得られた回答標本数はかならずしも多くなく、一・五%程度であるとはいえ、これらの人々が強烈なオペラ愛好家であるとすれば、重複して複数のオペラを見ている可能性もあり、これらのデータからオペラ愛好家の実像を析出することが次の作業となって来る。

このAUDⅢファイルを構成する人々が、どのようなオペラ愛好振りを示しているかを検討してみる。昭和四十九年以降毎年ミュンヘン国立オペラ、メトロポリタンオペラ、イタリア・オペラと外来オペラ公演を迎えた日本は、昭和五十二年には、ベルリン国立オペラとモスクワ・オペラとを迎える盛況振りであった。これらの外来オペラに少くとも一回は観にいった人々四九八人（全体の三九・九%におよぶ）に対して、日本の創作オペラを見ている人は僅かに一〇九人に過ぎない。そして、双方に属する人は、七五人となっている。これを、外来オペラ公演に毎年二回以上行っている二四人のなかでは、さらに一一人と減少している。[1] もっともこのことは、日本人創作のオペラに対する冷淡さであって、日本人オペラ公演に対する冷淡さを意味してはいない。過去一年間にこの調査対象のオペラ以外の日本人のオペラ公演を少くとも一回以上は見ていると回答している人が、五五一人（四四・二%）に達することを考慮に入れると、日本のオペラ愛好家はすでに確立された西欧オペラの享受者と定義しても誤りではないであろう。

過去五年間に外来オペラを少くとも一回見た人のなかでドイツ・オペラを中心に観た者（ミュンヘン国立オペラ、ベルリン国立オペラのそれぞれを観ている者）、イタリア・オペラを中心に観た者（メトロポリタンオペラ、イタリア・オペラのそれぞれを観ている者）が、おのおの一八九、一七〇人居ることを考慮すると、日本にも強固なオペラ愛好家の層が成立して来つつあるといえるかもしれない。これら一連の外来オペラのすべてを少くとも一回は観た六九人について、その属性を見るならば、第7表で示す様になっており、かならずしも音楽を専業とする人々でないことは注目すべき点である。オペ

第7表　外来オペラ愛好家の属性

年齢		20—24	25—29	30—34	35—39	40—44	45—49	50—54	55以上	計	
男子	未婚	4	4	7	2	0	1	0	0	18	49
	既婚	0	1	8	1	6	7	4	4	31	
女子	未婚	1	3	0	2	0	2	0	1	9	20
	既婚	0	1	1	1	1	1	3	3	11	
計		5	9	16	6	7	11	7	8	69	

職業	事務職	管理職	芸術	医療	教育	その他	商工サービス	主婦	学生	無職	自由業
男子	13	7	1	3	8	8	3	—	1	0	5
女子	3	2	1	0	2	0	0	6	2	2	2

ラが、日本の社会でも、成熟した大人の娯楽としての地位を占め始めたことの証左であるといえる。

(1)　この一一人は、男子学生三人、主婦一人、専門・技術職一人を除くと、教師・自由業に属するものであることを考えると、極めて例外的な属性パターンであるといえよう。

第8表　日本のオペラと日本のシンフォニーとを聴いている者

ファイルの種類	AUD I (N響)	AUD III (二期会)	AUD II (TP・TK)
回答数	3201	1031	1275
日本のオペラまたは日本のシンフォニーを聴いた者	550	459	52
回答数に占める比重(%)	17.2	44.5	4.3

IV　オーケストラの聴衆とオペラの観衆

我々は、先に「二期会オペラの聴衆の年齢分布が、ほぼN響の聴衆および東フィルと東響の聴衆の中間に位置していることが注目される」と述べたけれども、この三つのファイルの聴衆相互の特性をより明確にするには、これら三

つのファイルの相互の照合実験を行う必要がある。

いま三つのファイルで相互に照合しうる条件として、オーケストラのファイルについては、日本のオペラを観たことのあるもの、オペラについては、日本のオーケストラの公演を聴いたことのあるものを設定する。第8表に示すように、AUDⅢファイルとAUDⅡファイルとでは、データ数がほぼ同じであるにもかかわらず、AUDⅡファイルではそのうちの約四・三％、AUDⅢファイルと対比するならば僅かに七％程の人々が該当するに過ぎない。これに対して、NHK交響楽団のファイル（以外AUDⅠと略す）の場合は、約一七・二％、AUDⅢファイルと対比するならば、約一九・八％が該当する。このことは、AUDⅡファイルに含まれている聴衆の関心がオペラの外にあることを暗示している。実際に、AUDⅢファイルをAUDⅡファイル、AUDⅠファイル相互の間の聴衆の属性パターンの共出現頻度を求めてみると、この間の状況がより明瞭に現われて来る。（第9表・第10表参照）

AUDⅡファイルと共出現するものは、学生で、男子の場合はアマチュアとして音楽を楽しむものであり、女子の場合は高校・大学の音楽専攻のものに限定されていく。このことは、オーケストラの演奏会としては、AUDⅠファイルと比較して、AUDⅡファイルがより多く音楽の専門家を志している者を含んでいるという特徴と同様に、AUDⅢファイルの場合も、一方では、多くの声楽を中心とした音楽専門家を志しているものと若い合唱団員の背後にあるコーラス・グループが聴衆に含まれていることを推定させる。一方AUDⅠファイルと共出現するものは、圧倒的に自分では音楽活動をしていないものであり、しかもその属性パターンは一九〇種にも達している。その共出現頻度の高い属性パターンの職業は、男子では管理職、教員が主であるのに対して、女子では、教員、主婦、無職である。

このことは、AUDⅢファイルが、AUDⅠファイルと同様に、あるいはそれ以上に成熟した大人の娯楽という側面と、オーケストラとはまた別の、AUDⅡファイルと同様の音楽家志向の人々の参加を声楽を軸とした学生群により、実現していることを物語っている。

この関係は、日本のオーケストラと日本のオペラとの相互の聴衆であるという条件を緩めた場合でも大筋では

第9表　AUD I ファイルと AUDⅢファイルの共出現頻度別パターン数

AUDⅢファイル ＼ AUD I ファイル	0	1	2–5	6–10	11–15	16–20	21–25	26–30…	33–123	パターン数	AUDⅢファイル該当者数(計)
0		557	226	36	8	4	2			833	—
1	224	48	36	13	1					322	322
2—5	43	7	21	17	7	4	2	2	1	104	291
6—10	4		1	2	1	1	1		1	11	73
11—15			1	1		1		1	1	5	61 (1010)
⋮											
19—103									5	5	263
パターン数	271	612	285	69	17	10	5	3	8		
AUD I ファイル該当者数(計)	—	612	799	513	222	173	113	82	491		
						(3005)					

(注 1)　該当データ総数; AUD I (N 響) 4,644 人; AUDⅢ (二期会) 1,377 人

(注 2)　パターン類型　　パターン属性

類型・パターン位置*	性別	未既婚	年齢	職業	月収	最終学歴
NHK 型 (0, 22)	男	未婚・既婚	25—28歳・35—39歳	事務職	12—14万円・20—24万円	大学
(0, 21)						
(0, 19)	女	未婚	25—29歳	教師	12—14万円	大学
準NHK型 (2, 26)	男	既婚	40—44歳	管理職	25—29万円	大学
(6, 40)		未婚	15—19歳・20—24歳	大学生・大学院生	無収入	(大学・大学院)
(5, 27)						
(5, 33)	女	既婚	25—28歳・40—44歳・45—49歳	主婦	無収入	大学・高校
(12, 29)						
(5, 22)						
双方出現型 (74, 123)	男	未婚	20—24歳	大学生	無収入	(大学)
(14, 18)			25—29歳	大学院生	無収入	(大学院)
(19, 40)	女	未婚	15—19歳	高校生・大学生	無収入	(学生)
(40, 40)						
(103, 94)			20—24歳	大学院	無収入	(大学院)
準二期会型 (13, 7)	女	未婚	15—19歳・20—24歳	高校生・短大生	無収入	(学生)
(11, 5)						
二期会型 (9, 0)	男	未婚・既婚	25—29歳・30—34歳	専門技術職	15—19万円	大学
(7, 0)						

* パターン位置は (　,　) のなかに (二期会の該当者数, N 響の該当者数) を入れて示してある。

第10表　AUDⅡファイルと AUDⅢファイルの共出現頻度別パターン数

AUDⅢファイル ＼ AUDⅡファイル	0	1	2—5	6—10	12—19	…	34—139	パターン数	AUDⅢファイル該当者数(計)
0		227	70	8	2			307	—
1	295	25	19	4				343	343
2—5	56	9	33	6				104	289
6—8	1	3	5	1	1			11	74
⋮									(1019)
11—14			2	2	1			5	61
⋮									
16—103				1			4	5	252
パターン数	352	264	129	22	4		4		
AUDⅡファイル該当者数（計）	—	264	370	158	60		319		
				(1171)					

（注 1） 該当データ総数；AUDⅡ（TP・TK）1,655 人；AUDⅢ（二期会）1,464 人

（注 2） パターン類型　　パターン属性

類型・パターン位置*・性別・未既婚・年　齢・職　業・月　収・学　歴

TP・TK型	(0, 7)		14歳以下	中学生	無収入	(中学生)
	(0, 7)	男・未婚	20—24歳	専門技術職	12万円以下	短大
	(0, 7)				12—14万円	大学
	(1, 8)				15—19万円	大学
	(0,17)		25—29歳	専門・技術職	12—14万円	大学
	(2, 6)				15—19万円	大学
	(2, 6)				15—19万円	大学院
	(0,12)	女・未婚	20—24歳		12万円以下	短大
準TP・TK型	(13,19)	女・未婚	15—19歳	短大生	無収入	短大
	(6,12)	女・既婚	40—44歳	主婦		高校
双方型	(74,139)	男・未婚	20—24歳	大学生	無収入	(大学)
	(19,34)	女・未婚	15—19歳	高校生	無収入	(学生)
	(74,43)			大学生		
	(103,103)		20—24歳	大学生	無収入	(大学)
準二期会型	(16, 8)	男・既婚	45—49歳	管理職	40万円以上	
	(14, 3)	男・未婚	25—29歳	大学院生	無収入	(大学院)

＊ パターン位置は（　，　）のなかに（二期会の該当者数，TP・TK の該当者数）を入れて示してある。

変化はない。ただこの場合には、AUDⅢファイルとでは共出現せず、AUDⅠ・Ⅱファイルにのみ出現する頻度が高い、オーケストラ固有の聴衆、逆にAUDⅢファイルにのみ出現する頻度の高い、オペラ固有の観衆というものが明示されるはずである。

AUDⅡファイル固有のものとしては、二十代前半の独身の専門・技術職の存在が浮びあがって来る。ここでは、短大・専門学校卒業が大学卒業と同程度存在することは、楽器という器具を通じての技術職特有のメカニズムに関する共感があるのかもしれない。将来の検討にゆだねたい。また、さらに属性条件の統合を行うことによって別箇な共通因子が発見されるかもしれないが、オペラに固有の層というのは明瞭には浮びあがってこない。

結びにかえて

これだけの日本の現在の音楽会の聴衆に関するデータから想定される、音楽愛好家の実像は何であろうか。AUDⅠ、AUDⅢに現われている所の比較的高年齢層の聴衆の増加は、ヨーロッパ音楽が、若年層の通過儀礼としてではなく、それぞれの人々の生活の一部にやっと組み込まれてきたことを暗示している。このことは、まさに聴衆の一人一人が、パトロンである近代の音楽演奏会の公演のあり方に近づいてきていると解釈することが出来る。とするならば、ヨーロッパ社会の経験してきた、多くの人を演奏会場に引き寄せるために、演奏会場の大容量化と、それに比例してのオーケストラの大編成化と、さらにはそれに適した音楽の要求という道をたどるのかもしれない。一部に見られてきた、マーラーやブルックナーの曲に対する聴衆の愛好の現われというのは、その証左かもしれない。けれども、それは逆にプログラムの編成に、大規模化した一公演当りの享受者全員の関心をそそる様な曲でなければならないという制約を課すことになる。これはベルリオーズのオペラ、例えば、《ベンヴェヌート・チェリーニ》のたどった上演難の道でもある。このことが、将来の日本の演奏芸術のあり方にとって何を意味するか、特に我々の二十世紀は、演奏芸術を演奏会場で維持するには、あまりにも多くの競争相手をかかえているだけに、十分な検討を必要とする課題である。

最後にAUDⅡ、AUDⅢに見られるように直接音楽演奏の未来の送り手でもある音楽専攻の学生の占める比

重の高さは、戦後の日本の大学教育における音楽関係の課程の急速な増加と密接に結びついていると考えられる。このことは、将来の音楽愛好家のあり方の予測をするうえに考慮すべき事態である。

（一橋大学教授）
（一橋大学助手）